



鹿の子遺跡



町塚遺跡  
(有限会社三井考測撮影)

石岡市立ふるさと歴史館 第26回企画展

# 石岡を掘る 総まくり



佐久上ノ内遺跡

令和3年

8月4日(水) ▶ 10月31日(日)

月曜休館 (祝祭日のときはその翌日)

午前10時～午後4時30分

入館無料

## 石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社 1-2-10 石岡小学校敷地内

電話 0299-23-2398

## 石岡を掘る 総まとめ

### ■目次

I	旧石器時代	1
II	縄文時代	2
III	弥生時代	15
IV	古墳時代	16
V	古代	28
VI	中世	43
VII	近世	54
VIII	近代	55

### ■例言

本冊子は、令和3(2021)年8月4日～10月31日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第26回企画展に際して作成したものです。

展示および本冊子の編集は谷仲 俊雄（石岡市教育委員会 文化振興課）が行い、執筆は谷仲のほか、茂木 雅子（元文化振興課）、竹内 智晴（文化振興課）が行いました。

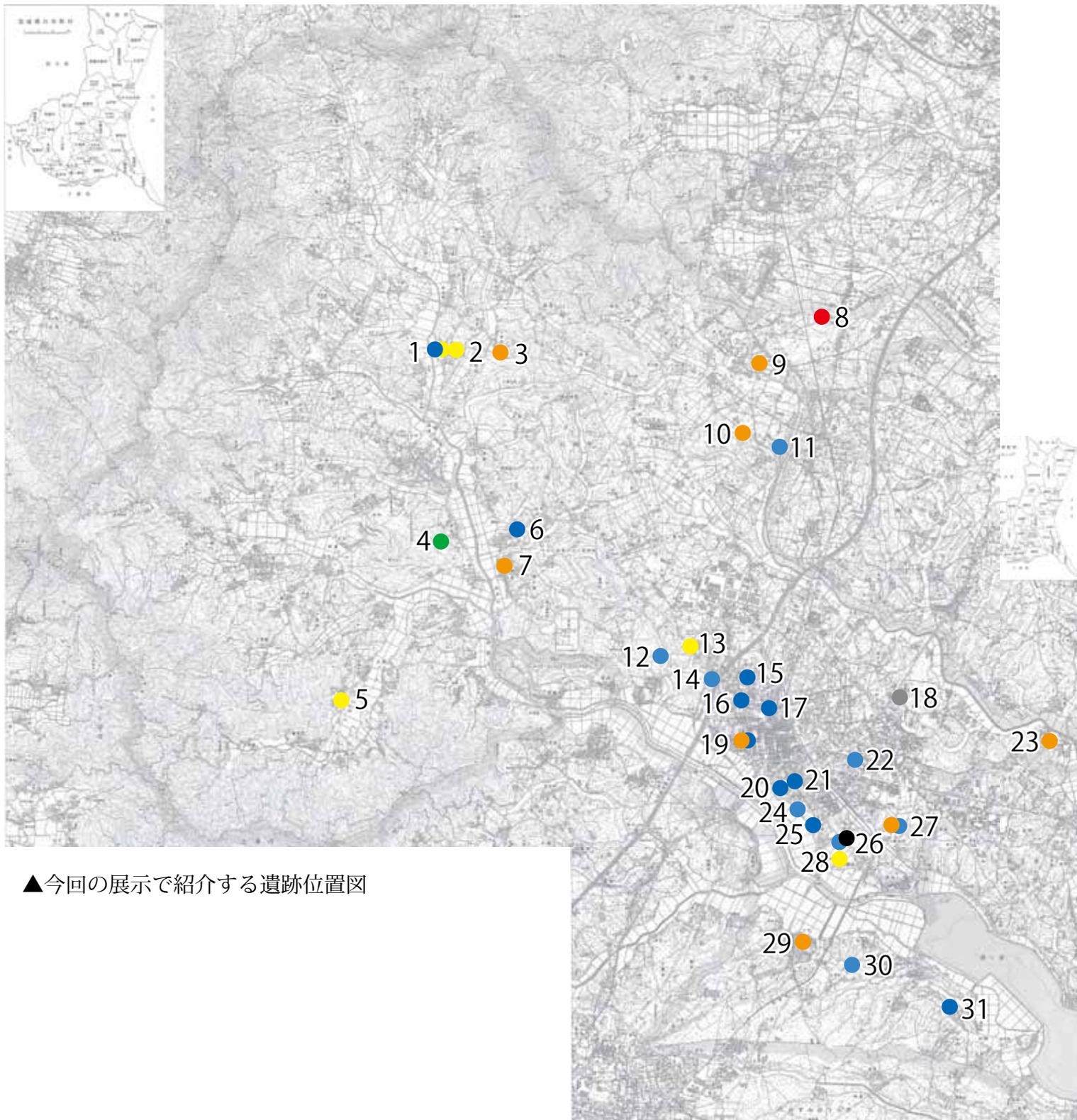
展示および本冊子の作成にあたっては、各発掘調査報告書など多くの文献を参考にいたしました。

本冊子で使用した地図は、国土地理院数値地図25000から部分転載いたしました。

### ■謝辞

以下の方々・機関にご協力いただきました。ありがとうございました。

梅田由子 ， 川井正一 ， 川口武彦 ， 黒澤彰哉 ， 作山智彦 ， 佐々木憲一 ，  
田中 裕 ， 萩野谷 悟 ， 橋本勝雄 ， 三井 猛 ， 皆川貴之  
茨城県教育委員会 ， 茨城大学人文社会科学部考古学研究室 ，  
株式会社地域文化財研究所 ， 株式会社東京航業研究所 ，  
関東文化財振興会株式会社 ， 公益財団法人茨城県教育財団 ，  
明治大学文学部考古学研究室 ， 有限会社毛野考古学研究所 ，  
有限会社日考研茨城 ， 有限会社勾玉工房Mogi ， 有限会社三井考測



## 今回の展示で紹介する遺跡

1	佐久上ノ内遺跡	16, 42
2	佐久松山遺跡	18
3	野田館跡	52
4	サカイツカ遺跡	15
5	岩谷古墳	25
6	宿畑遺跡	41
7	片野城跡	50
8	猫松遺跡	1
9	東成井山ノ神遺跡	43
10	山崎塩海道遺跡	49
11	北田向遺跡	8
12	中島遺跡	5
13	鹿の子大塚山古墳	22
14	鹿の子遺跡	2
15	尼寺ヶ原遺跡	35
16	宮部遺跡	39
17	常陸国分寺跡	33
18	八軒台掩蔽壕	55
19	常陸国府跡・府中城跡	31, 44
20	外城遺跡	30
21	茨城廃寺跡	28
22	新池台遺跡	4
23	弥陀ノ台遺跡	48
24	田島遺跡	7
25	田崎遺跡	38
26	中津川遺跡	12, 54
27	東田中遺跡	9, 47
28	舟塚山古墳	19
29	三村城跡	45
30	下ノ宮遺跡	13
31	町塚遺跡	40

# 猫松遺跡

—2万年前の石器製作跡—

平成16・21年度に国道355号石岡岩間バイパス建設に伴い、茨城県教育財団が発掘調査を行いました。旧石器時代(約20,000年前)の石器集中地点や縄文時代中期(約5,000年前)・古墳時代の竪穴住居跡などが発見されています。



石器集中地点からは、ナイフ形石器や削器などの製品だけではなく、原石や石を打ち欠いて残った石核、製作過程で飛び散った石くずも多数出土していることから、石器を製作した跡と考えられます。

石器には、瑪瑙めのう(北茨城産)や安山岩あんざん(大洗産)といった茨城県



内で採れる石だけではなく、流紋岩りゅうもんや頁岩けつといった県外で採れる石も使用されていました。石器に適した石材を求めまわる旧石器時代人の知恵や苦労がうかがえます。

▲石器集中地点の調査の様子  
(『猫松遺跡・長原遺跡』2011年, 茨城県教育財団より転載)

# か こ 鹿の子遺跡

—縄文時代の落とし穴—

古代の武器生産工場や漆紙文書の出土で有名な鹿の子遺跡ですが、縄文時代の遺構も確認されています。

平成23年度に個人住宅建設に伴い発掘調査を行ったところ、大きさは1.6m程度ですが、深さが1.7mもある穴を発見しました。穴は、底にいくほど極端に狭くなっていて、身動きができないほど。遺物は出土しませんでした。同じような形態の穴は縄文時代によくみられ、狩猟のための「落とし穴」と考えられています。

落とし穴は3基見つけましたが、規則的な配置ではないことから、追い込み猟に使用したものとは考えにくいものです。



▲鹿の子遺跡で発見した「落とし穴」



ろ、凹地周辺に位置していることから、豪雨などによって凹地に溜った水を求めて集まるイノシシやシカなどの通り道（ケモノ道）に仕掛けたものと考えられます。



▲鹿の子遺跡の落とし穴の分布

# 新池台遺跡

—縄文時代前期の集落と墓—

昭和56年度に「フローラルシティ南台」建設に伴う発掘調査が行われており、平成22年度には特別養護老人ホーム建設に伴い発掘調査を行いました。



発見されたのは、縄文時代前期（約6,000年前）の竪穴住居跡と墓坑群など。竪穴住居跡は51軒も発見され、昭和56年度のもの合わせると70軒余り。茨城県屈指の縄文時代前期の大集落になります。

墓坑には装身具が副葬されていました。滑石製の玦状耳飾、滑石製の管玉、琥珀製の丸玉が円を描くように並び、縄文時代



▲耳飾，管玉，丸玉が土器とともに出土

前期前半の土器と一緒に出土しました。複数種類の装身具が出土したという点はもちろん、土器が出土したことによって時期が判明したお墓として、貴重な事例です。

# 中島遺跡

—副葬された愛用の万能ナイフ—

平成22年度に石岡地方斎場建設に伴い発掘調査を行いました。古墳時代から奈良時代にかけての集落跡や、中世の堀跡を発見しました。縄文時代では、早期から晩期に至るまでの各時期の土器が出土しています。



縄文時代早期(約10,000～6,000年前)では、落とし穴や炉穴を発見しています。炉穴とは、地面に掘った穴の中で火を焚いた跡。住居の中に作られたものではなく、屋外に設けられていました。炉穴の内部は赤く焼けていることから、土器を置いて煮



## ▲縄文時代早期の炉穴

穴の右奥が赤く焼け、焼土が集中しています。火を焚いたところです。

炊きによる調理や、魚や肉などの燻製くんせいを作っていたと考えられます。

縄文時代前期(約6,000～5,000年前)では、竪穴住居跡ぼこうのほかに墓坑

群を発見しています。

墓坑は、新池台遺跡と同じ頃（約6,000年前）のもの。副葬品は全体的に少ないのですが、石器が副葬されていたものがありました。

石器は、「石匙<sup>いしさじ</sup>」という名前がついている種類のもの。しかし、「匙」といっても、スプーンではなく、ナイフ。先端部付近の両脇にえぐられている部分があり、この部分に



▲お墓に副葬されていた石匙

紐をひっかけて携帯した「万能ナイフ」です。埋葬された人の愛用品だったのでしょうか。

また、今回の「石匙」は細長いのが特徴です。このような石匙は、東北地方によくみられるものです。中島遺跡からは、東北地方との関係がうかがえる土器も出土しています。東北地方とゆかりのある人が埋葬されていたのかもしれませんが。

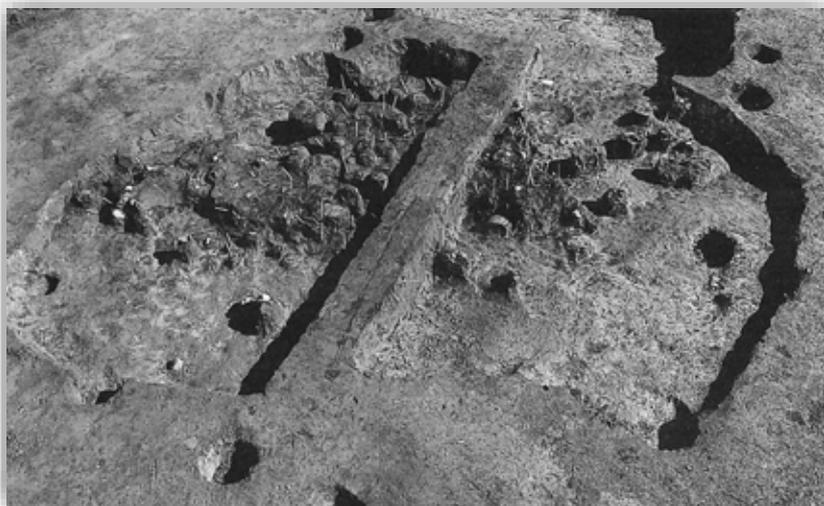
# 田島遺跡

— 縄文時代の石鏃製作跡 —

一般国道6号千代田石岡バイパス建設工事に伴い、平成16～20年に発掘調査が行われました。縄文時代から平安時代にかけての集落跡や、平安時代の水場遺構、中世の火葬施設、古代～近世の水田跡などが確認されています。なかでも縄文時代で注目されるのは、石鏃の製作が行われていたと考えられる住居跡です。



第23号住居跡と名付けられた縄文時代前期(約6,000年前)の住居からは、石鏃のほか、<sup>くさび</sup>楔形石器や製作過程で剥離した<sup>はくへん</sup>微細な剥片が出土しています。楔形石器と剥片は、炉をはさんだ中央部北西寄りと南寄りの2ヶ所に集中していました。小形の石



## ▲ 第25号住居跡の石器・剥片出土の様子

600点近くの石鏃や剥片が出土。隣の第23号住居で製作したゴミを廃棄したのでしょうか(『田島遺跡(南光院地区・南光院下地区)』茨城県教育財団, 2008年より転載)

材を持ち込んで、素材となる楔形石器をまず作成。それを成形し、石鏃を仕上げていたと考えられます。そして、出来上がった石鏃で、狩猟や漁労に向かったのでしょうか。

# 北田向遺跡

—縄文時代前期のムラ—

平成27年度に市道（美野里・八郷線）建設に伴い発掘調査を行ったところ、竪穴住居跡9軒を発見しました。住居跡の時期はいずれも縄文時代前期後半。新池台遺跡や中島遺跡よりも少し新しい時期です。



道路部分だけの調査でしたが、住居のなかに炉があったのは9軒中2軒だけ。見つかっている炉も、焼土が若干確認できただけで、繰り返し使用されたような状況ではありませんでした。住居の床部分も、踏み固められた痕跡はあまりありませんでした。

長期間にわたって定住した集落というよりも、漁労や狩猟、採



集といった食料を獲得するための拠点として作られたムラだったのでしょうか。

▲発掘調査区の全景

# 東田中遺跡

—いにしえの海辺のくらし—

一般国道6号千代田石岡バイパス建設工事に伴い、発掘調査が行われています。平成25・26年度に調査された4区では、縄文時代の斜面貝層(貝塚)や遺物包含層が発見されました。

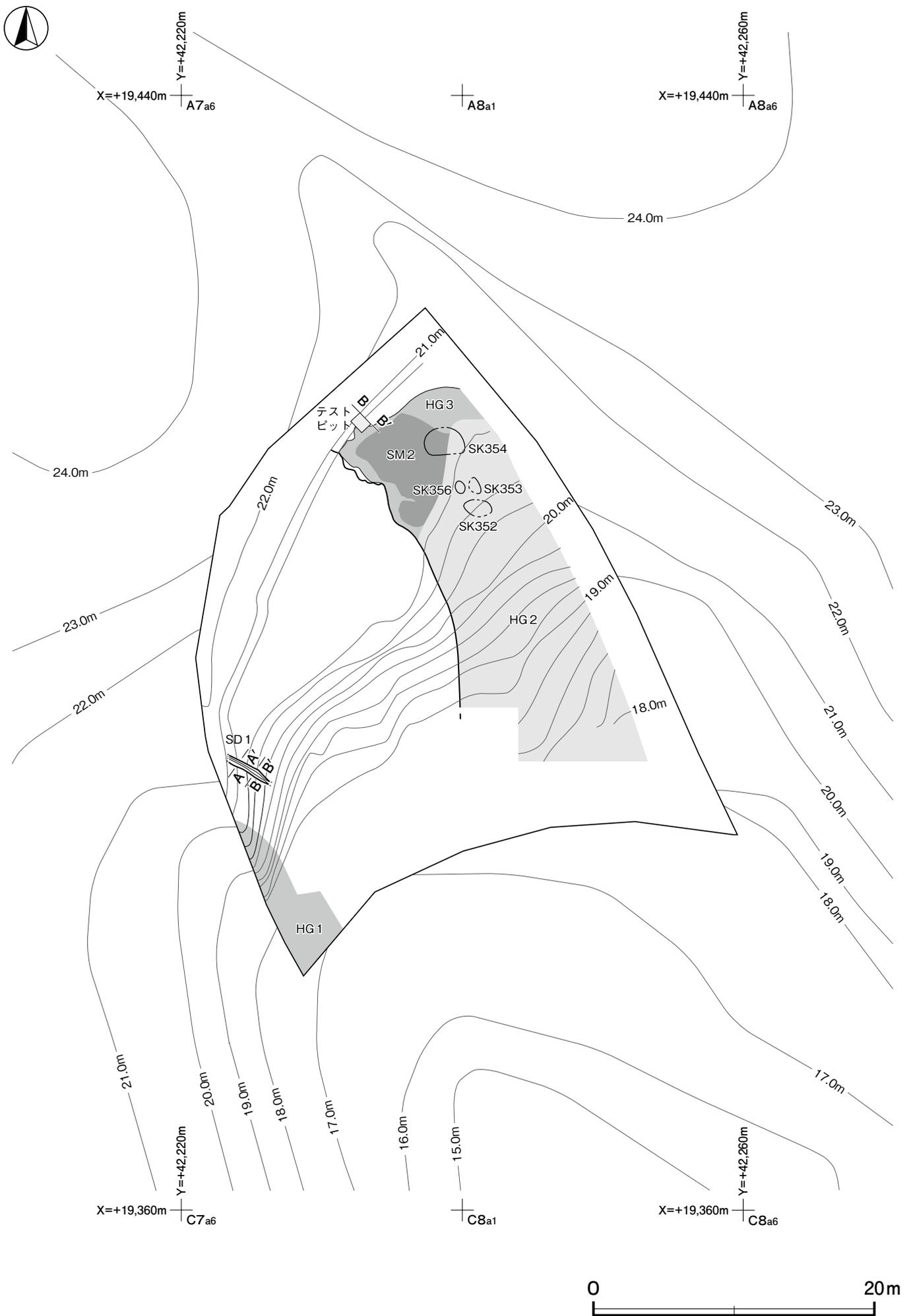


貝塚は、縄文時代中期(約4,500~4,000年前)のもので、厚さは約2m。谷部の窪地を埋めつくすように堆積していました。カキ、ハマグリ、ウミニナ、アカニシなどの貝類のほか、イワシ、クロダイ、ヒラメなどの魚類、シカなどの獣類の骨が出土しており、当時の食生活をうかがうことができます。また、貝類・魚類は主に海水域に生息するものであることから、霞ヶ浦周辺には、縄

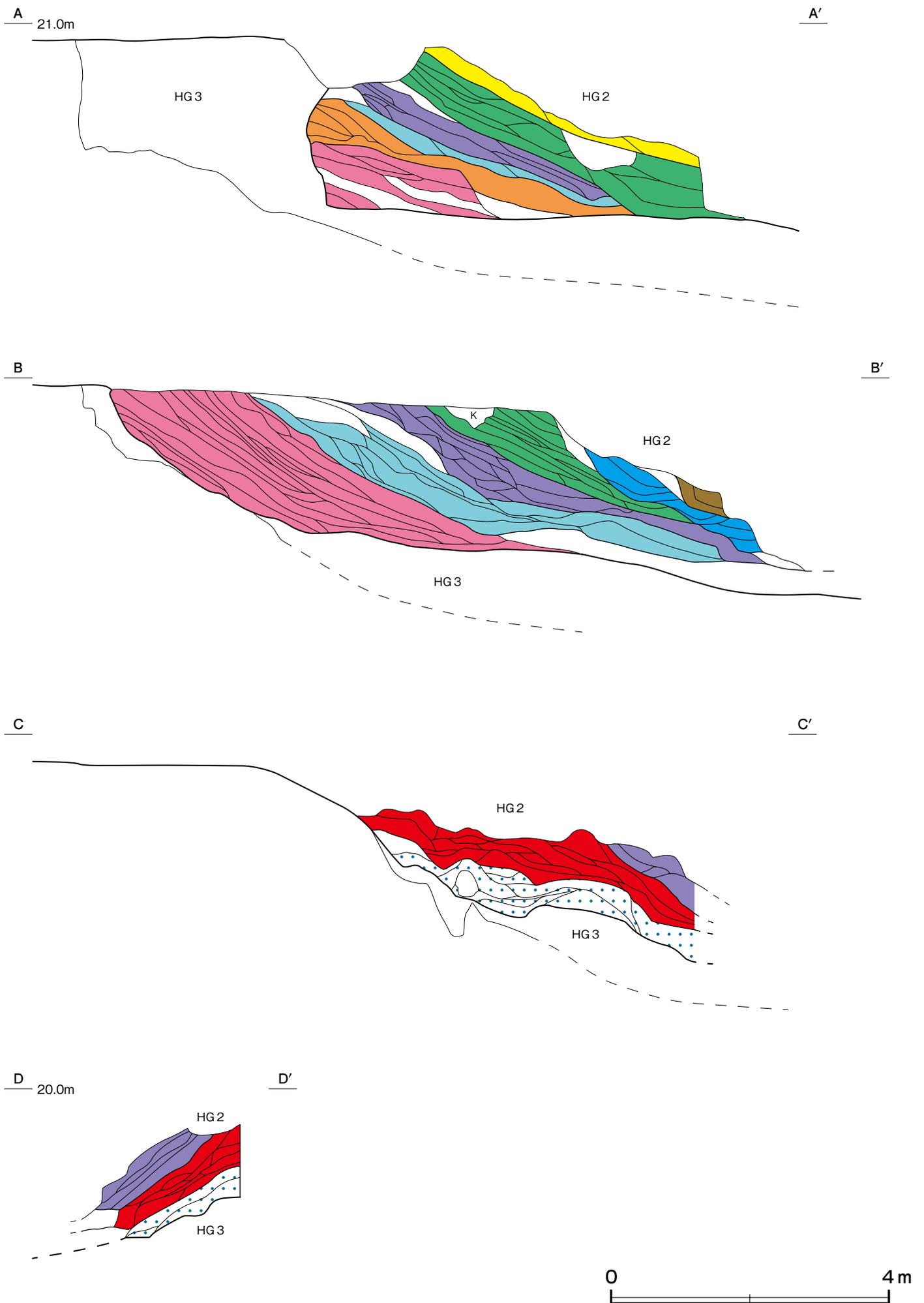


文海進にともなつて入江状の海が広がっており、人々は漁労や狩猟をしながら生活していたことがわかります。

▲貝塚の調査の様子



▲東田中遺跡 4 区遺構全体図（茨城県教育財団文化財調査報告第 434 集より引用）



▲第2号貝層実測図（茨城県教育財団文化財調査報告第434集より引用）

# 中津川遺跡

— 縄文時代の大集落 —

一般国道6号千代田石岡バイパス建設工事に伴う調査が断続的に行われており、今年度も進行中です。また、個人住宅建設に伴う調査も行われており、遺跡全体の様相が少しずつわかってきています。



縄文時代前期から近世に至るまで、長期間にわたる土地利用がされていますが、中心となる時期のひとつが縄文時代中期から後期(約5,000～4,000年前)です。この時期は、かんじょう環状集落を取り囲むよう多数の土坑が存在する「環状集落」です。出土遺



物には、土を掘る  
だ せい せき ふ打製石斧や、土器  
の破片を魚網用の  
すい(おもり)錘として再利用し  
ど き へん すいた土器片錘があり  
採集や漁労—豊  
かな自然が集落の  
繁栄を支えていた  
と考えられます。

## ▲個人住宅に伴う発掘調査(平成24年度)

縄文時代中期の遺構が密集。住宅と浄化槽部分の100㎡余りの調査面積にもかかわらず、収納コンテナ14箱分の遺物が出土した。

# 下ノ宮遺跡

—三村地区の大遺跡—

三村地区に存在する遺跡で、東西1.5km、南北1kmの広範囲にわたっています。農道建設や電波塔建設、防火水槽設置工事に伴い、4回の本格的な発掘調査を行っています。旧石器時代から近世に至るまで、幅広い時期の資料が出土している市内でも有数の大遺跡です。縄文時代を見ても、旧石器時代から縄文時代草創期と考えられる石器や、早期・前期・中期・後期・晩期の各時期の土器、さらには土偶が発見されています。



旧石器時代から縄文時代草創期の石器は、平成15年度の電波塔建設に伴う発掘調査で出土しました。住居跡などは確認できていませんが、「せつかく石核」という石器を製作した際に残った原石です。石材は、「あんざんがんガラス質黒色安山岩」という那珂川流域で採集されるもの。那珂川まで石材を採集に行ったのか、交易によって手に入れたのでしょうか。

縄文時代の竪穴住居跡は、計11軒が発掘されています。そのうち、9軒が前期(約6,000～5,000年前)、2軒が中期(約5,000～4,000年前)です。

前期の住居跡は、新池台遺跡や中島遺跡、北田向遺跡よりも古い前期初頭のもの。北田向遺跡と異なり、ほとんどの住居で炉や柱穴が見つ



▲縄文時代前期の竪穴住居跡

ています。さらには、炉は中央よりやや南寄りに設置されている、柱穴は建物の軸線を挟んで対応する、というように規則性が認められます。遺物の出土量も多いことから、居住地となる拠点的な集落と考えられます。

中期の住居跡は2軒と、前期に比べると少なくなります。遺跡全体で出土している土器も、前期よりも少なくなっていますので、中期になると集落の中心は違う場所に移ったのでしょうか。



▲縄文時代中期の竪穴住居跡

後期以降の住居跡は発見されていません。しかし、後期や晩期の土器も見つかっていますので下ノ宮遺跡の地は縄文時代を通じて利用されていたことがうかがえます。

# サカイツカ遺跡

—八郷初の  
弥生住居の発掘—

平成24年度の市道改良に伴う発掘調査で、弥生時代の竪穴住居跡が発見されました。実はこれが八郷地区における弥生時代の住居跡の初めての発掘調査でした。

水田稲作による豊かな社会がイメージされる「弥生時代」ですが、八郷地区の遺跡は少ないうえ、後半期のものばかり。縄文時代から継続的に発展してきたとは考えにくいところかんがいです。水田開発にあたっては灌漑設備を整備する必要があり、土木技術や鉄製品が不可欠。弥生時代も後半期になって、ようやく手に入るようになったのでしょうか。

では、その重要な鉄器をどのように手に入れたのでしょうか。それを解く手がかりに、「紡錘車」ぼうすいしゃがあります。県内の弥生時代

の遺跡から出土することが多く、サカイツカ遺跡からも土製のものが出土しています。鉄器と交換するために盛んにはた機織りをし、一方で鉄器を携えかいこん開墾を進める。そんな弥生人の姿が浮かんできます。



▲発掘された弥生時代の住居跡

# 佐久上ノ内遺跡

—古墳時代の豪族居館—

平成25年、農道建設に伴い発掘調査を行ったところ、幅3m前後で深さ1m程ある古墳時代前期の溝を発見しました。発掘できたのは東西方向と南北方向の一部でしたが、航空写真を見ると、東西方向の溝の延長線上に黒い部分が続き、そして南に向かって直角に曲がっています。この黒い部分は、考古学ではソイルマークと呼ばれるもので、地下に遺跡があるために土壌の乾燥状態が異なり、それが反映されたものと考えられます。

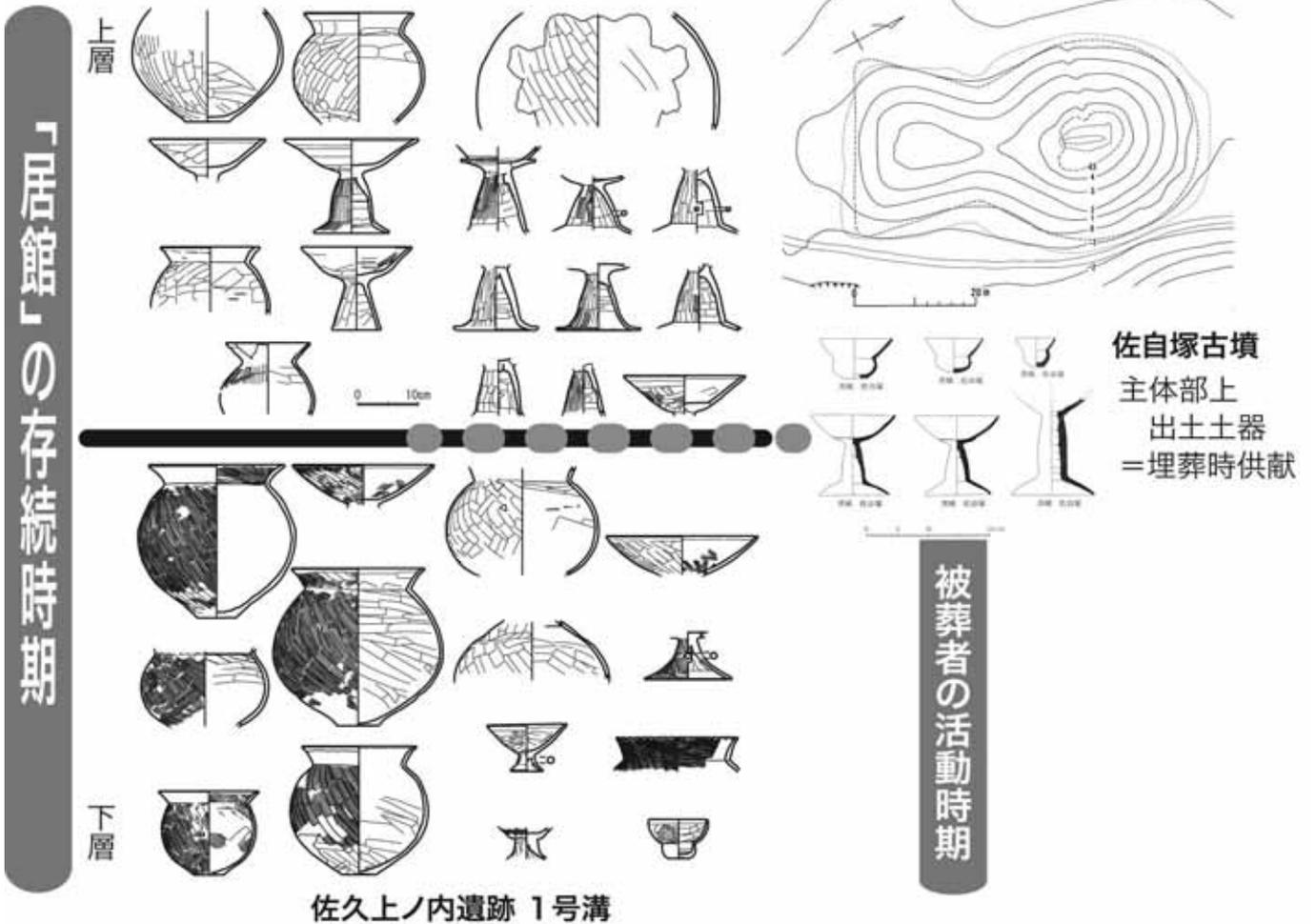


このソイルマークを参考にすると、東西70m、南北50m以上の範囲を溝が堀のように方形に囲んでいたこととなります。このような溝一堀の区画は古墳時代の一般集落では珍しいもので、古墳に埋葬された有力者が住んでいた「豪族居館」の可能性が高く、石岡市では初めての発見になります。

その有力者が埋葬された古墳は、出土した土器の年代から、遺跡の南700m程のところにある市史跡・佐自塚古墳である可能性が高いと考えられます。考古学的な所見から、古墳と居館とのセット関係がわかる極めて貴重な事例と言えます。



▲遺跡の航空写真(写真上が北)  
溝の延長線上に黒い部分が続いています。



# 佐久松山遺跡

—古墳時代の神まつり—

平成20年、農道建設に伴い発掘調査を行いました。竪穴住居跡12軒や掘立柱建物1棟を発見し、奈良時代から平安時代前半まで連続と営まれた集落跡であることがわかりました。



さらに注目される出土品は、「石製模造品」という古墳時代の祭祀の道具です。「三種の神器」としても知られるように、古代の祭祀の道具として鏡・剣・玉は重要なものでした。しかし、それらは貴重品で、なかなか手に入れることはできませんでした。そこで、代用品として、石で作られたのが「石製模造品」です。

筑波山東麓は、石製模造品の発見が多い地域として注目されています。筑波山に対する信仰は、奈良時代の『常陸国風土記』にも書かれています。筑波山を対象とした祭祀が古くから行われていたのかもしれない。



石製模造品の出土遺跡分布図▶

(『研究ノート』9号, 2000年, 茨城県教育財団より転載)

# 舟塚山古墳

—物理探査で見えてきた埋葬施設—

舟塚山古墳は、東国第2位の規模を誇る前方後円墳で、採集・出土している埴輪から、5世紀前葉の築造と考えられています。

埋葬施設は、これまで発掘調査が実施されたことはありませんが、

東国第1位の群馬県太田天神山古墳と同じく、この時期の大王墓に採用されていた長持形石棺と考える説が有力でした。

平成23年度に物理探査(レーダー探査・磁気探査)が行われ、埋葬施設の様子が見えてきました。後円部墳頂では、レーダー探査で、東西14m、南北6mの長大な埋葬施設と思われる反応が得られました。しかも、木棺が朽ちてつぶれてしまったような反応もあることから、石棺ではなく、木棺を粘土でくるんだ粘土槨の可能性が高くなりました。また、磁気探査では、埋葬施設の南西角付近に鉄製品の埋納が予測されるような反応が得られました。

前方部墳頂でも、レーダー探査にて、長さ8m、幅2.5mの埋葬施設の反応が得られています。

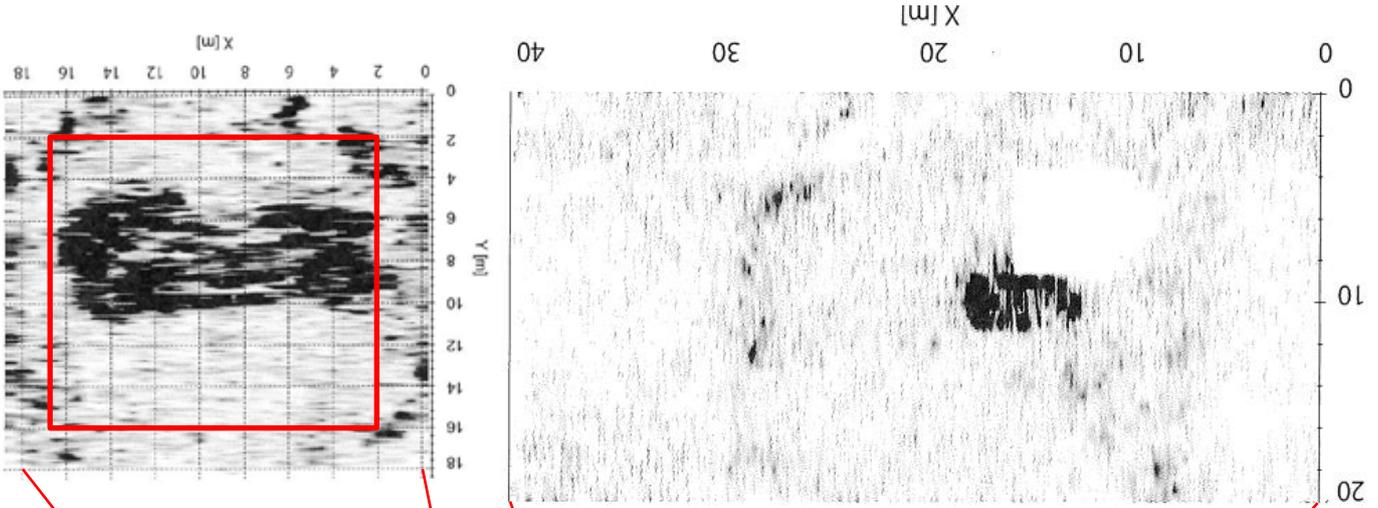
長持形石棺を採用しないところに、舟塚山古墳被葬者の独自性がうかがえるのかもしれませんが。



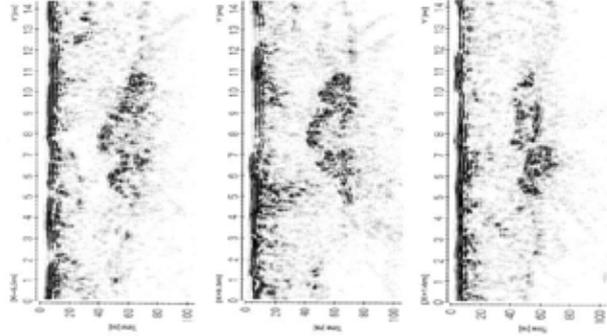


物理探査の成果

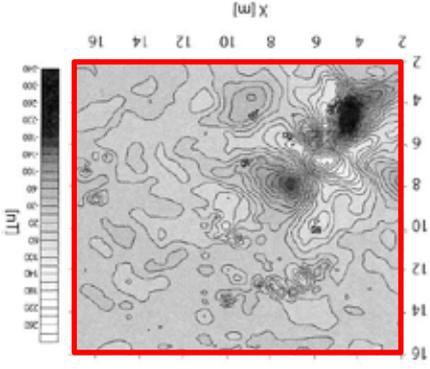
地中レーダー探査 平面



地中レーダー探査 断面



磁気探査 平面



佐々木憲一編2018  
『霞ヶ浦の前方後円墳  
—古墳文化における中央と周縁—』  
明治大学文学部考古学研究室  
よりの作成

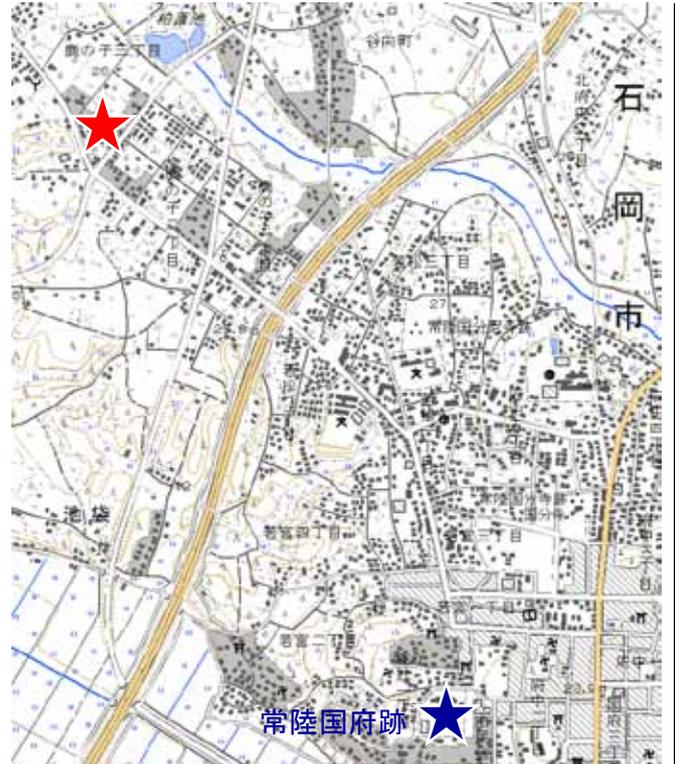
# 鹿の子大塚山古墳

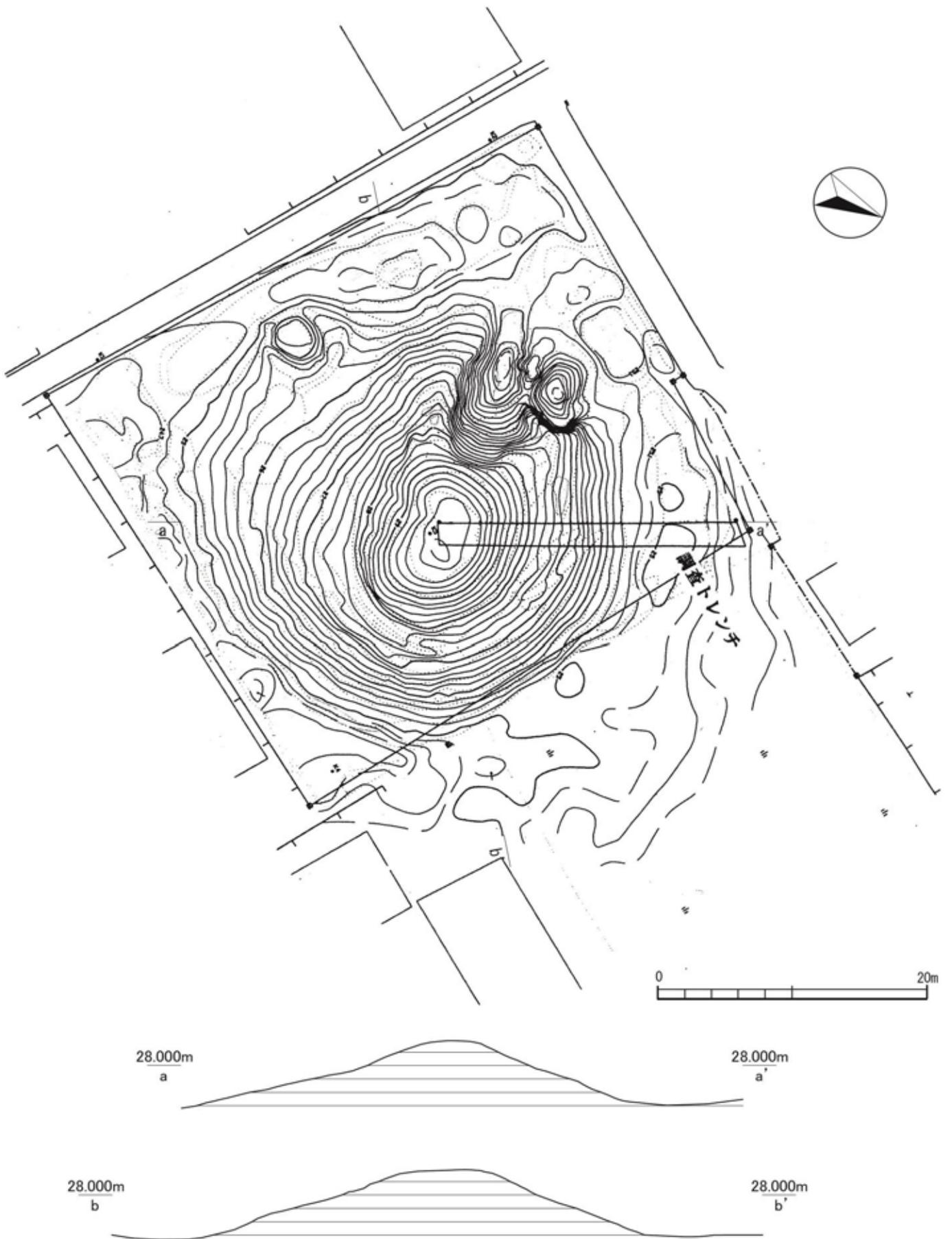
平成29年4月、石岡市の指定文化財(史跡)に指定された古墳です。円墳で墳丘径は28m。市内の古墳のなかではそれほど大きな古墳ではありません。ではなぜ、指定文化財となったのでしょうか。

理由のひとつは、古墳が築かれた時期です。墳丘の形態や、古墳

時代に一般的な埴輪が発見されていないことから、古墳時代のなかでも終末期、7世紀前半の古墳と考えられています。古墳時代終末期は、前方後円墳が築造されなくなった時代で、大きな古墳も築造されなくなります。鹿の子大塚山古墳は、古墳時代を通してみればそれほど大きな古墳ではありませんが、終末期に限れば、市内最大級の古墳になります。

もうひとつの理由は、古墳の位置です。南東約2km、現在の石岡小学校にあたる常陸国府では、7世紀後半に建設がはじまります。鹿の子大塚山古墳は、国府に近い古墳で、しかも国府建設の直前段階の古墳となります。古墳から律令国家への動向を考えるうえで、鍵となる古墳と言えます。





▲鹿の子大塚山古墳の測量図



▲正徳3年(1713)府中村上染谷絵図(原資料:照光寺蔵)

# いわや 岩谷古墳

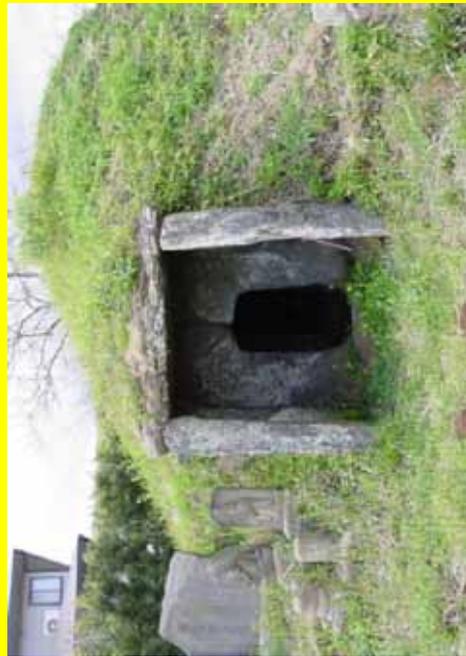
—東日本大震災からの復旧をとげた古墳—

青田地区に存在する古墳で、横穴式石室が開口しています。石室の中には、小型の石仏が整然と安置されています。江戸時代の太子信仰によって奉納されたもので、それゆえ石室が良好な状態で保たれてきたと考えられます。



平成23年3月11日の東日本大震災によって、石室の壁石が1枚倒れてしまいました。古墳が築造されたのは、7世紀中葉頃。1300年以上にわたって維持されてきたものが壊れてしまったこととなります。それだけあの地震の大きさがうかがえます。

平成29年度、所有者の全面的なご協力のもと、石室の修復工事が行われました。壁石が1枚倒れたただけとは言っても、天井石を外さないと直すことができません。天井石を外すには、墳丘を掘削して石室を露出させなければいけません。墳丘の掘削とは、古墳の破壊です。しかし、壁石が倒れているということは、天井石を支えるものがないということで、石室のさらなる崩壊につながる危険性もありました。そこで、掘削によって失われる墳丘については発掘調査を行い、そのうえで石室を解体、修復し、墳丘の復元を行うこととなりました。



▲震災前の岩谷古墳(平成19年4月19日撮影)



▲震災直後(平成23年3月17日撮影)



①



②

葦道部分の墳丘の調査を行った①  
後、墳丘を除去し、葦道の石材を解  
体しました②③。



③



⑤



④

次に、前室部分の墳丘の調査を行い  
④、墳丘を除去しました⑤。



⑥

倒れていた壁石を除去すると⑥、石  
仏が下敷きになっていました⑦。



⑦



⑧  
 墳丘の調査⑧の後、石室の組み立てを行いました⑨⑩。



⑨



⑩

壁石の転倒の原因となっていた壁石と天井石の隙間には、埋め石を行いました⑩。



⑪



⑫

石室組み立て⑫の後、墳丘を復元し、下敷きになっていた石仏や、石室解体に伴って移動していた石仏や石碑も元に戻し、修復工事は完了しました⑬⑭。



⑬



⑭

# 茨城廃寺跡

—明らかにになった「茨木寺」—

石岡市貝地に位置する寺院跡で、平成28年度まで6次にわたる発掘調査が行われました。

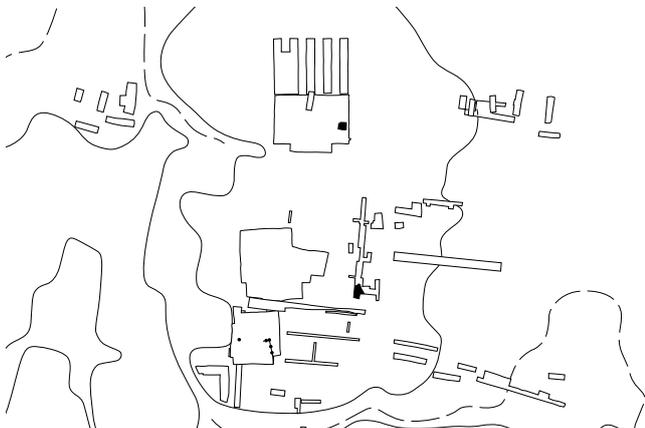
東に金堂、西に塔が並ぶ法隆寺がらん式伽藍配置で、北方には竪穴建物群、東方には掘立柱建物群と竪穴建物群からなる付属施設が存在しています。



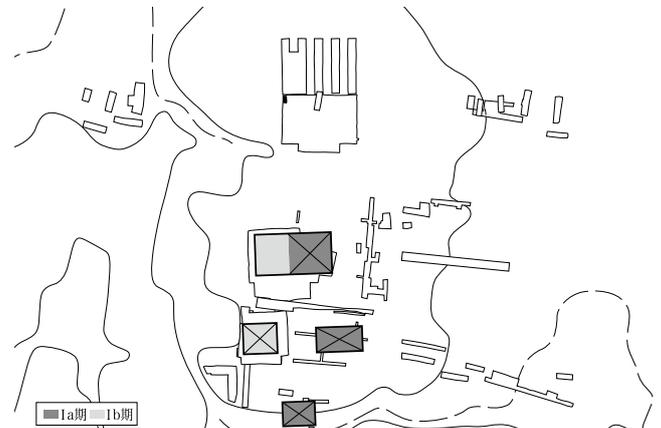
7世紀中葉～後葉に小規模な仏堂が建立され、7世紀末に本格的な伽藍を伴う寺院として整備され、8世紀前葉に完成します。その後、寺域を区画する溝の掘削や伽藍の再編・改修が行われますが、10世紀前半に伽藍は廃絶。掘立柱建物により再建されますが、それも10世紀後半に廃絶してしまいます。



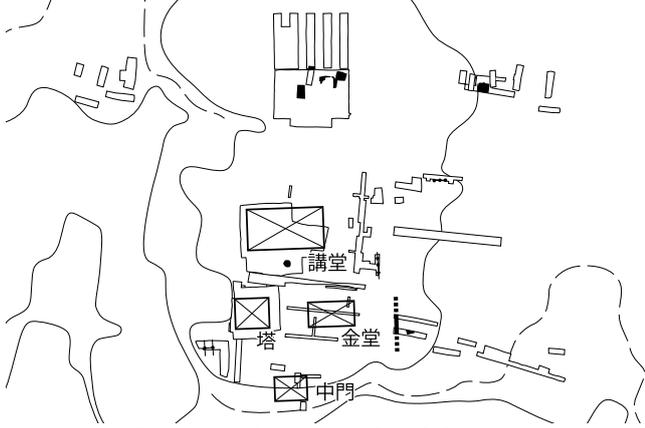
7世紀後半から10世紀前半にかけての創建から廃絶に至るまでの変遷が、その初期段階、再建段階までが明らかにになった希少な事例です。



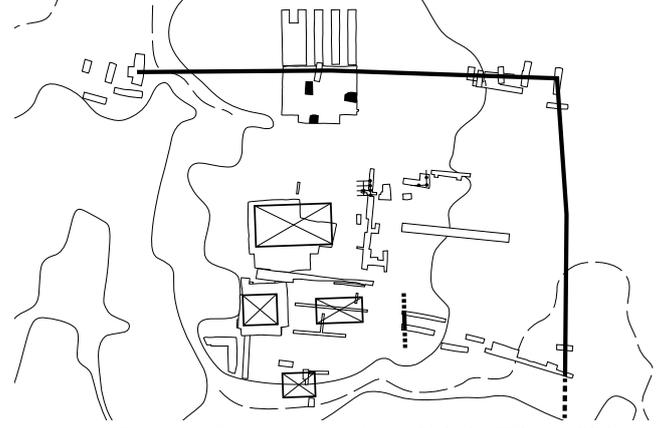
プレI期（7世紀中葉～後葉）下層掘立柱建物と竪穴建物



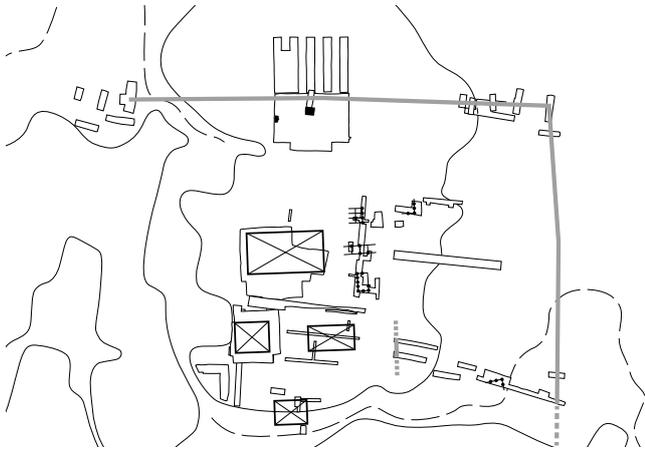
I期（7世紀末）主要堂塔の造営



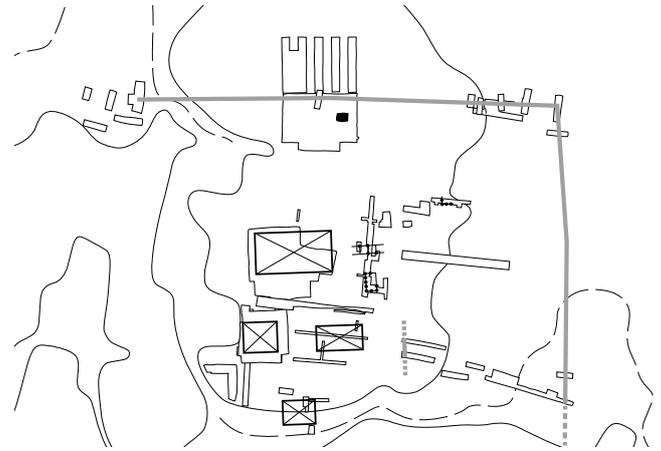
II期（8世紀前葉）伽藍の成立



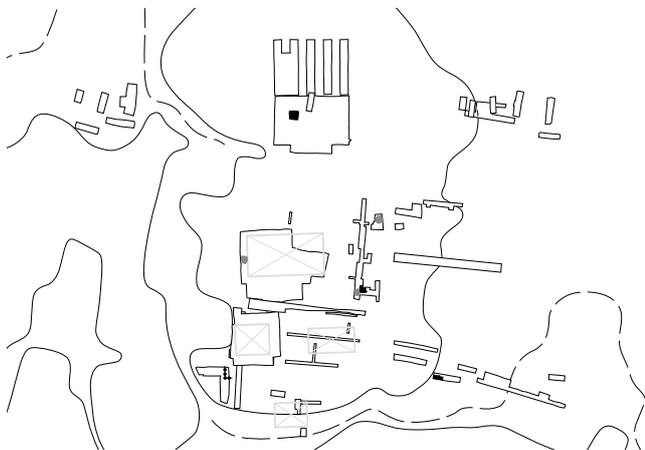
III a期（8世紀中葉～後葉）寺院地区画溝の掘削



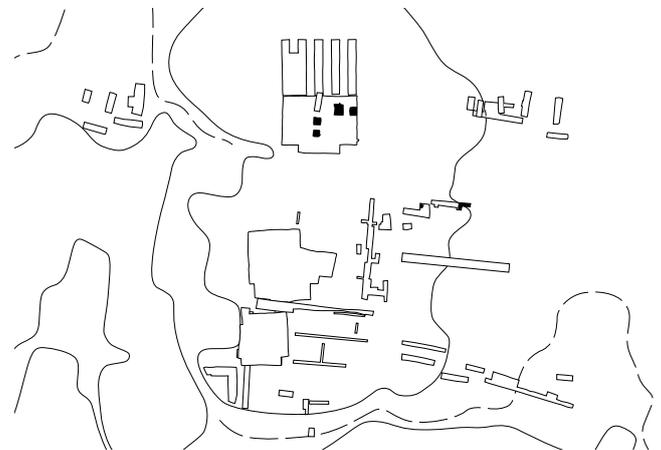
III b期（9世紀前半）伽藍の再編、区画溝の機能低下



IV期（9世紀後半）伽藍の改修



V期（10世紀前半）伽藍の廃絶と掘立柱建物による再建



VI期（10世紀後半～）再建掘立柱建物の廃絶

0 50m

▲茨城廃寺跡の変遷

# と じょう 外城遺跡

—古代茨城郡役所の推定地—

茨城廃寺跡の南西約0.3kmに存在する鎌倉時代から戦国時代の城館で、現地には今でも堀や土塁が残っています。

奈良・平安時代の土器や瓦も散布しており、「フンダテ(古館)」「カ

ンドリ」という地名も残ることから、古代常陸国の茨城郡の役所ぐうけ ぐんが(郡家、郡衙)に推定されています。

なかでも昭和46年に出土した軒丸瓦は、常陸国府の国庁に葺かれるために導入されたものよりも一段階古く、8世紀中葉以前と考えられるものです。とすると、8世紀前半段階に瓦葺きの



建物の存在が予想できることとなります。その建物こそが古代茨城郡役所でしょう。

その建物跡を探して、発掘調査を進めています。

# 常陸国府跡

—国庁の全容が明らかに—

常陸国府跡は、平成10年度から18年度までの発掘調査により、石岡小学校の敷地内地下で発見されました。調査では、国府の中心こくちようであり、儀式や政務を行う国庁と、行政実務を行う曹司ぞうしの存在が明らかとなり、建物の配置や構造とともに、その遷り変わりも確認されました。

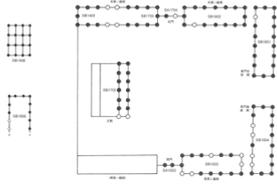


国庁のはじまりは、今から約1300年前の7世紀末頃。その後も同じ場所で11世紀頃まで、約300年間機能していたと考えられ、国庁の誕生から消滅までを通史的に見ることができます。

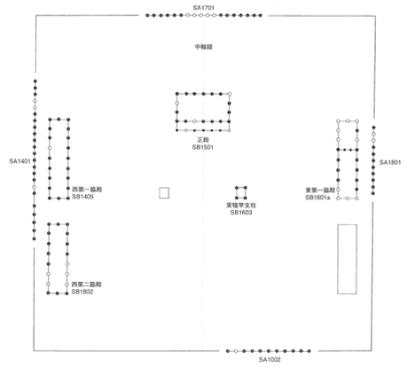
国庁は、四方を塀で囲まれた一辺約100mの区画をもっていました。その内部には、正殿せい でん・前殿ぜん でん・脇殿わき でん・楼閣ろう かくなどの建物跡が、左右対称に整然と配置されていたことが確認されました。また、ある時期、これらの西側には国庁正殿の規模を上回る曹司が建設されていたことも判明しました。

このように国庁のほぼ全容が確認された例は極めて少なく、全国的にも大変貴重な遺跡といえます。

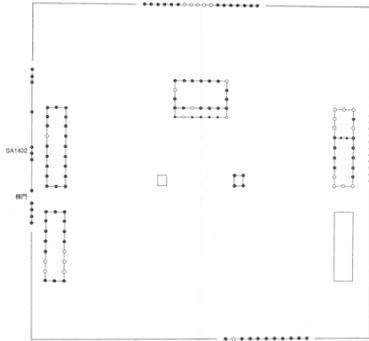
現在遺跡は、小学校の校庭の地下に保存されています。



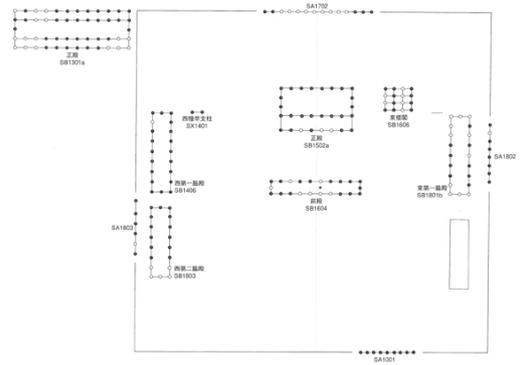
第0期(7世紀末～8世紀初頭)



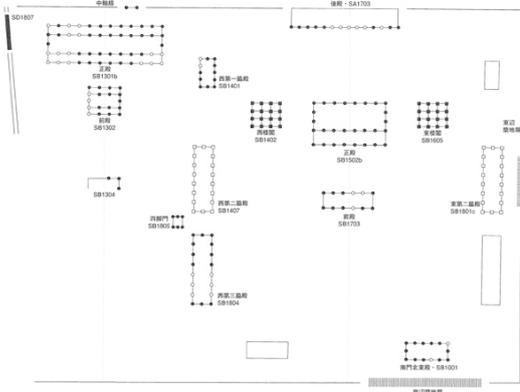
第1a期(8世紀前葉) 定型化国庁の成立



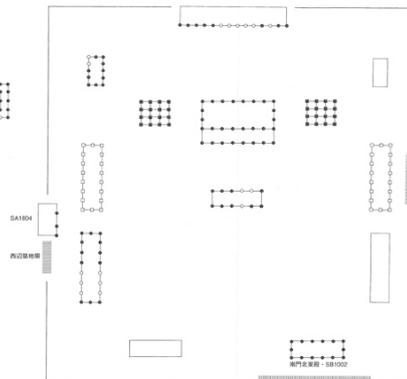
第1b期(8世紀前半) 国庁西辺の改作



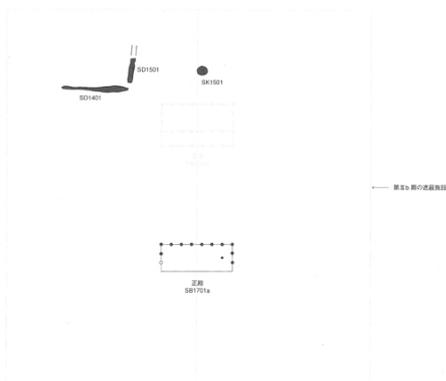
第2期(8世紀中葉) 国庁の瓦葺化と曹司正殿の出現



第3a期(9世紀前葉) 国庁と曹司の一体化



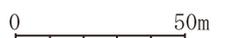
第3b期(9世紀後半) 曹司正殿の消滅と西辺の遮蔽



第4期(10世紀前半) 国庁院の消滅と終末期国庁の出現

第5期(～10世紀後半以降) 終末期国庁の消滅

▲常陸国府跡の変遷



# 常陸国分寺跡

—塔跡の発見—

常陸国分寺跡は、遺跡の国宝にあたる「特別史跡」に指定されており、ちゅうもん こんどう こうどう かいろう しょうろう中門・金堂・講堂・回廊・鐘楼とがらんいった主要伽藍を構成する建物群が確認されています。しかし、塔については不明でした。



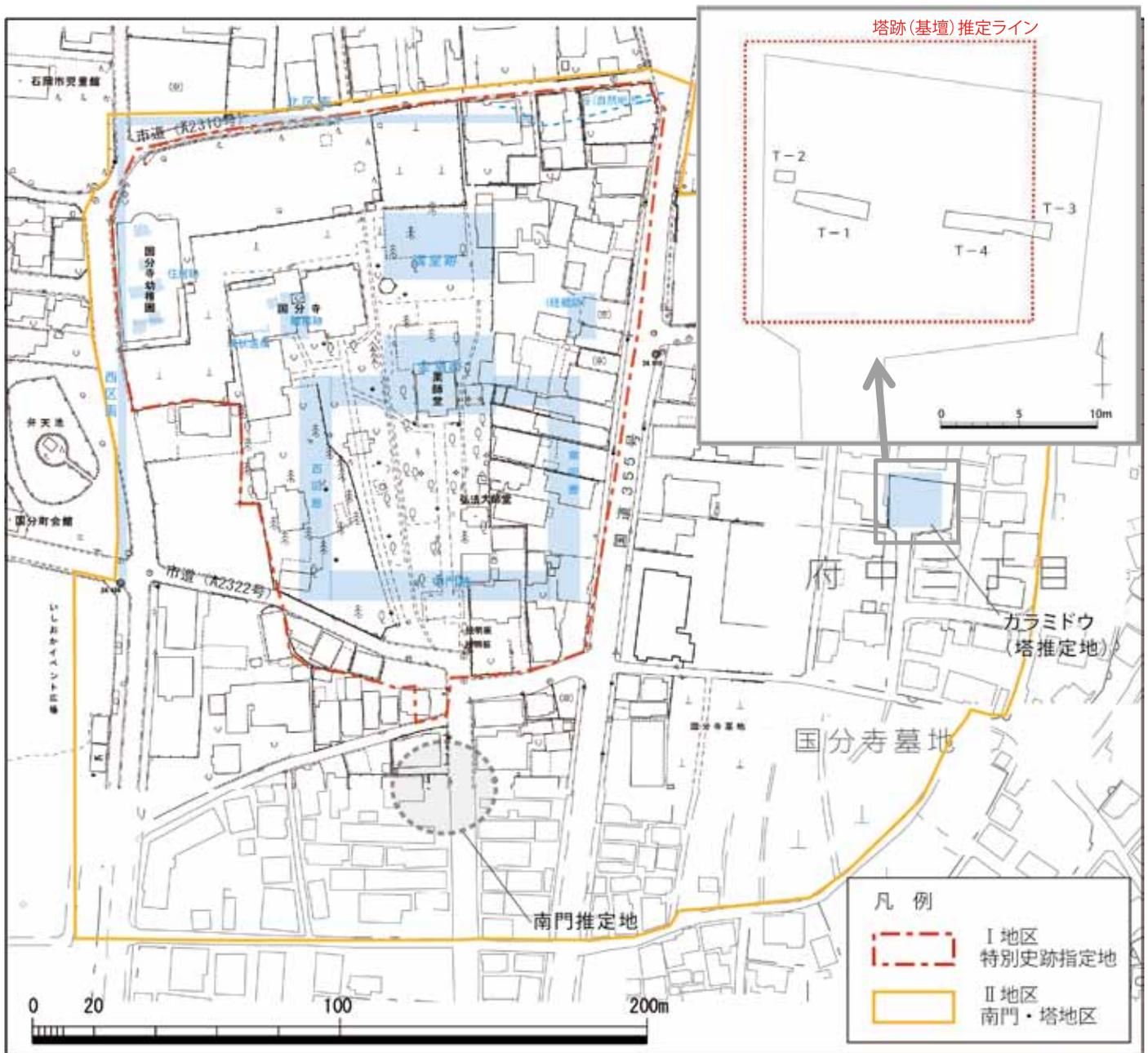
現在の国分寺の東側に「ガラミドウ」という地名があります。かつて3間×3間で中央に心礎と思われる石があったと記録されており、塔跡の存在が推定されてきました。しかし、その後建物が建設され、礎石も失われてしまいました。

令和元年、土地所有者の協力をいただいたことから、「ガラミドウ」の発掘調査を行いました。その結果、はんちく版築（地盤改良工

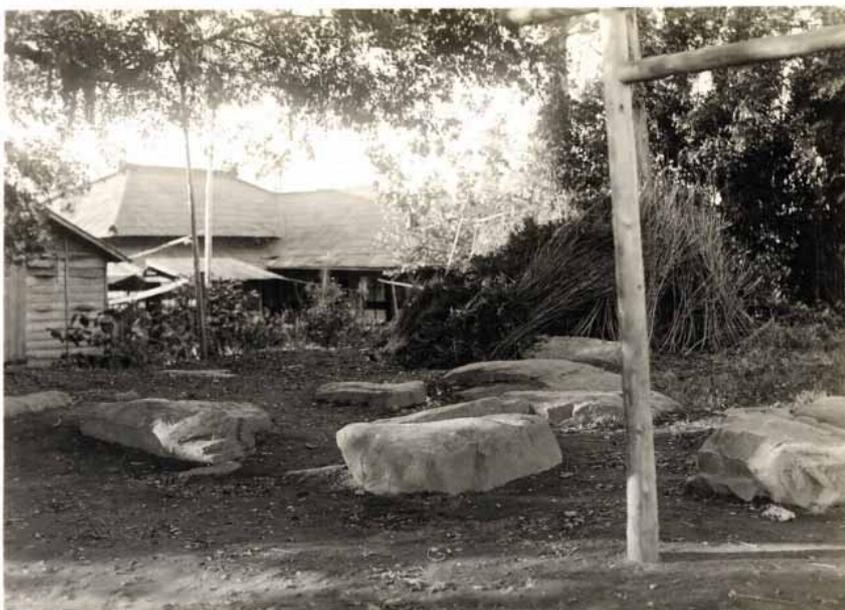


事)を持つ建物跡を発見しました。その規模は1辺15m以上。堅固な版築の状況から、国分寺の塔跡と考えられる建物跡の発見です。

▲ガラミドウで発見した版築(地盤改良工事)の様子



▲常陸国分寺跡と「ガラミドウ」の調査成果



Kokugakuin University

◀昭和初期の「ガラミドウ」  
 (國學院大学デジタル・ミュージアム「柴田常恵写真資料」より)

明治後半から昭和前期にかけて活躍した考古学者 柴田常恵氏が残した写真です。

「常陸石岡 ガラ御堂礎石 廣瀬栄一氏より 昭和六、一一」とメモされています。

# 尼寺ヶ原遺跡

—寺の東隣に存在した  
小さな掘立柱建物の性格は？—

石岡市若松の常陸国分尼寺跡の周辺に存在する遺跡です。昭和62年の発掘調査では「尼寺」と墨書された土器が出土しており、国分尼寺との関係が推測されていました。



平成25年12月、個人住宅建設に伴い発掘調査を行いました。調査地は史跡公園として保存している国分尼寺の中心地のすぐ東側であり、多くの発見が予想されました。

住宅の建設される70㎡あまりの表土を掘削したところ、発見できたのは径50cmから100cm程度の穴10個あまり。しかし、よく見るとうち8個は東西南北に整然と並んでいました。掘ってみると柱の腐った痕跡があることから、これらには柱が建っていた、つまり、掘立柱建物跡だと判断することができました。柱と柱の間の数は東西南北ともに2間で、面積は23㎡、7坪と小さなものでした。出土した土器から国分尼寺と同時期であり、関係する建物跡と考えられますが、残念ながら具体的な用途はまだわかっていません。寺のすぐ東側に存在した小さな建物、みなさんはどのように考えますか？



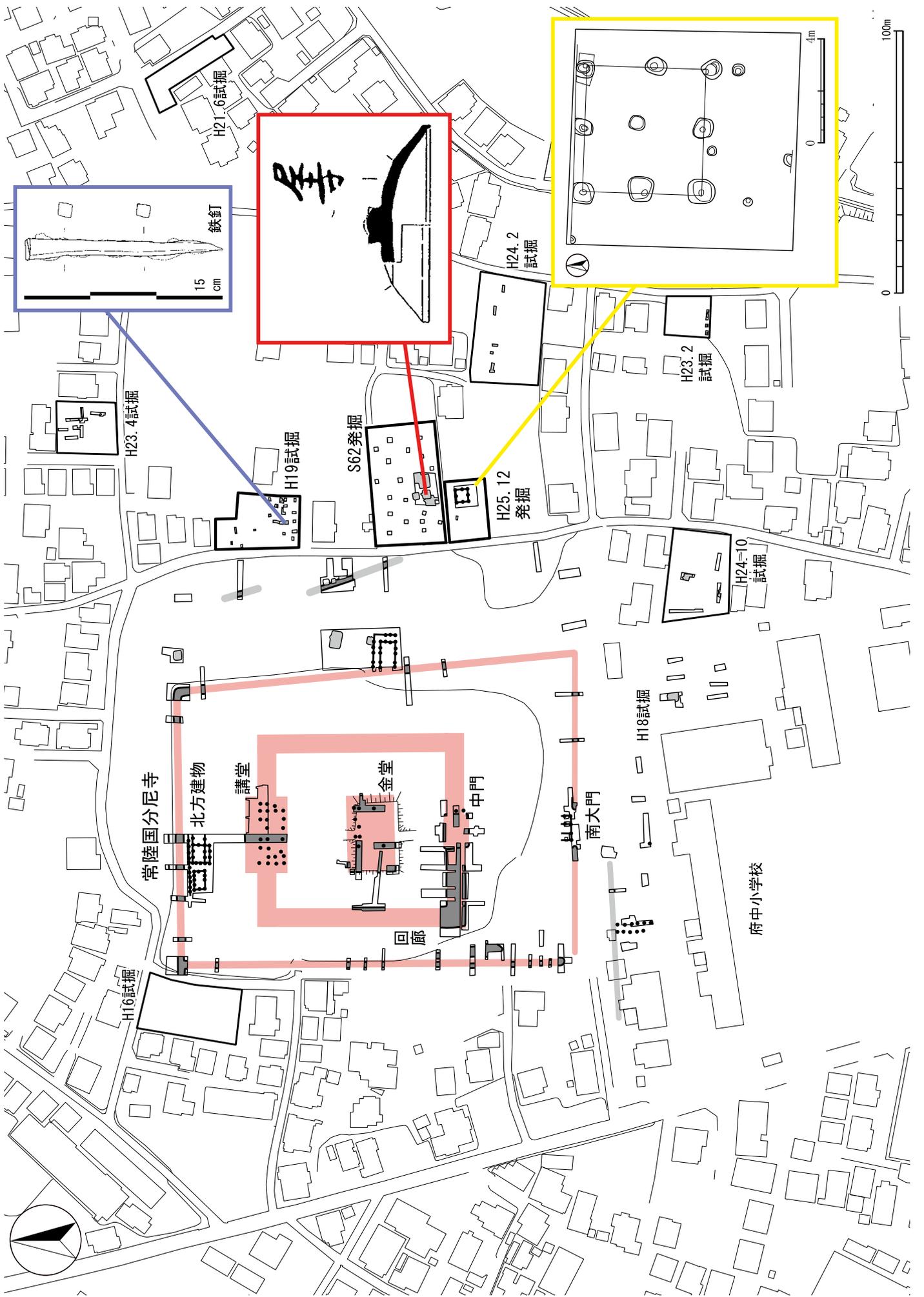
▲調査区の全景  
(奥の芝生が常陸国分尼寺跡)



▲遺構の確認作業風景



掘立柱建物の柱跡 ▶  
(黒い部分が柱の腐った痕跡)



▲常陸国分尼寺跡・尼寺ヶ原遺跡

# 田崎遺跡

—マツリで使われた土器—

平成20・21年度に国道6号線千代田石岡バイパス建設に伴い、茨城県教育財団が発掘調査を行いました。調査区中央部の斜面では、東海地方(静岡県湖西市)産の須恵器や土玉、土錘、炭化米など



がまとまって出土しました(第1号遺物集中地点)。実用品ではない、ミニチュアの土器も多いことから、マツリ—祭祀で使われたものと考えられます。

時期は7世紀末頃から8世紀初め頃。古墳時代から奈良時代



▲田崎遺跡の全景(『田崎遺跡』2010年, 茨城県教育財団より転載)

への移り変わりの頃の祭祀の様子を物語っています。当時の人々はどんな祈りを捧げたのでしょうか。

# みやべ 宮部遺跡

— 仏教信仰の浸透を示す小破片 —

平成25年12月、セレモニーホール建設に伴い発掘調査を行いました。奈良時代の終わり頃から平安時代にかけての集落跡を発掘し、土師器や須恵器といった日用食器や、うわぐすり 釉薬をかけた灰釉陶器や



緑釉陶器、焼き物で作った塔のミニチュア「瓦塔」が出土しました。瓦塔は、石岡市では国分尼寺に次いで2例目のものです。

宮部遺跡は、国分寺、国分尼寺、そして国府のいずれからも700～800m—徒歩10分ほどの近距離にあり、それらと密接な関係があった集落と考えることができます。とすれば、仏教と接する機会も十分にあったことでしょう。

これまで宮部遺跡では複数回の調査を行っていますが、発掘したのは平安時代の竪穴住居跡中心。本格的な寺院建築が存在したとは考えにくく、瓦塔を安置した簡易な仏堂があっただけと考えられます。しかし、塔は仏の遺骨ぶつしゃり（仏舍利）を納めるものであり、仏に対する供養でした。今回発見した小さな破片ですが、宮部遺跡の集落にも仏教信仰が信仰が浸透していたことを物語っています。



# 宿畑遺跡

—集落跡から手付瓶が出土—

平成18年、県道石岡筑西線バイパス建設に伴い発掘調査を行いました。また、平成29年にも店舗建設に伴い発掘調査を行っています。調査では、縄文時代の狩猟用の陥し穴や、古墳時代後期から平安時



代にかけての集落跡が発見されました。宿畑遺跡の存在する林地区は、「和妙類聚抄」に記載されている「わ みょうるいじょう しょう 拝師郷はや し ごう」であつたとされており、この集落跡は「て つけ へい 拝師郷」の一部と言えるでしょう。

宿畑遺跡の出土遺物のなかには、「て つけ へい 手付瓶」と呼ばれる陶器も出土しています。うわ ぐすり 釉薬のかかった精美なもので、東海地方から運ばれたと考えられます。手付瓶は仏様に水を備えるための道具と考えられるものです。その他にも文字の刻まれたぼう すい しゃ 紡錘車やとう みょうざら 灯明皿といった仏教に関する資料が出土しています。

調査地の周辺には「まん がん じ 万願寺」という地名も伝わっており、集落と一緒に寺院も存在していたのかもしれない。



◀ 出土した手付瓶

# 佐久上ノ内遺跡

—「木」墨書の意味は...—

佐久上ノ内遺跡では、平安時代の集落跡も発掘されました。そのなかで注目されるのは、文字が墨で書かれた土器—「墨書土器」の発見です。



佐久上ノ内遺跡では、9点の墨書土器が出土しています。読解することができない2点のほかは、「木」と書かれたものが5点、「林」と書かれている可能性のあるものが2点。「木」関係のものばかりということになります。

茨城県内でこれまで知られていた「木」の墨書土器は16点、「林」は11点だけ。佐久上ノ内遺跡での出土点数の多さが際立ちます。

今回の発掘調査地点と、「佐久の大スギ」との距離は200mほど。大スギの付近でも土器が採集できることから、佐久上ノ内遺跡の集落は大スギのところまで広がっていた可能性が考えられます。

墨書土器の年代は10世紀。そのころの大スギは、まだ樹齢200年余りでしょうか。しかし、今もその地にそびえる大スギを見ると、両者の関係性を考えずにはられません。

# 東成井山ノ神遺跡

— 鑄物師・沙弥善性の  
本拠地か —

平成23年度の発掘調査で変わったものが出土しました。丸瓦の破片のような焼き物でしたが、泥を落とすと内側には模様が。詳しく調べてみると、仏像の鑄型の足元の部分。一緒に出土した常滑焼の破片などから、13世紀後半から14世紀前半のものと考えられました。



鎌倉時代、常陸国宍戸荘鳴井郷には「沙弥善性」という鑄物師いもがいたことが知られています。鑄物師とは、仏像や梵鐘ぼんしょうなどの鑄造を行う職人。千葉県成田市東勝寺には、銘文から1311年に沙弥善性が製造したとわかる梵鐘が保管されています。

沙弥善性の本拠地である「鳴井郷」とは、石岡市東成井と考えられてきました。その地での仏像鑄型の出土。しかも沙弥善性の活動時期とも一致。東成井山ノ神遺跡の地が沙弥善性や彼の集団の本拠地であった可能性は極めて高いと言えます。



▲ 仏像の鑄型が出土した溝跡

# 府中城跡

—常陸大掾氏の本拠地—

鎌倉時代から戦国時代末期まで石岡地区を支配してきた大掾氏の本拠地です。奈良・平安時代には、「常陸国府」が置かれた地にあたります。



戦国時代、大掾氏は、小田城(つくば市)の小田氏、水戸城の江戸氏、小河城(小美玉市)の園部氏などと攻防を繰り返していました。そのため大掾氏は、三村城や取手山館(小美玉市)などの出城を築くとともに、府中城の守りを固めました。平成11年の石岡小学校の駐車場部分の発掘調査では、写真のような幅10m以上の大規模な堀跡が発見されています。さらに、その内側には土塁が築かれていました。



▲府中城の堀跡

しかし、その府中城も、1590年、豊臣秀吉を後ろ盾とする佐竹氏によって攻略され落城。中世常陸の名家・大掾氏は滅亡してしまいました。

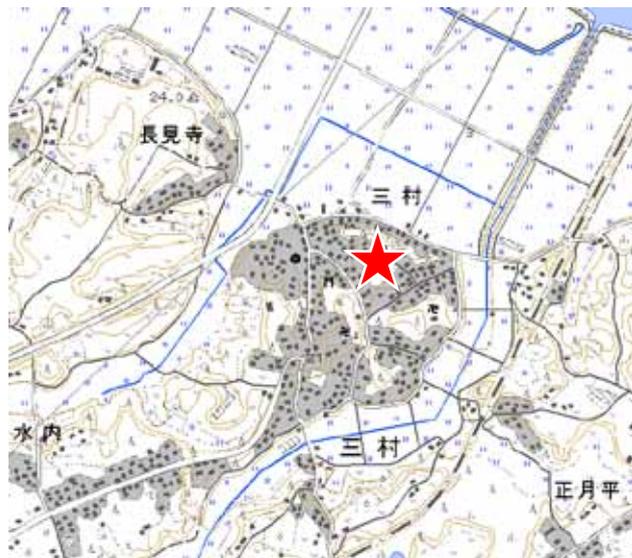
# 三村城跡

—埋められた堀

—兵どもが夢の跡—

現在の三村小学校を中心とする  
一帯に存在した戦国時代の城館で  
す。小田城(つくば市)の小田氏の進  
軍に備え、府中城の大掾氏によっ  
て築造されました。

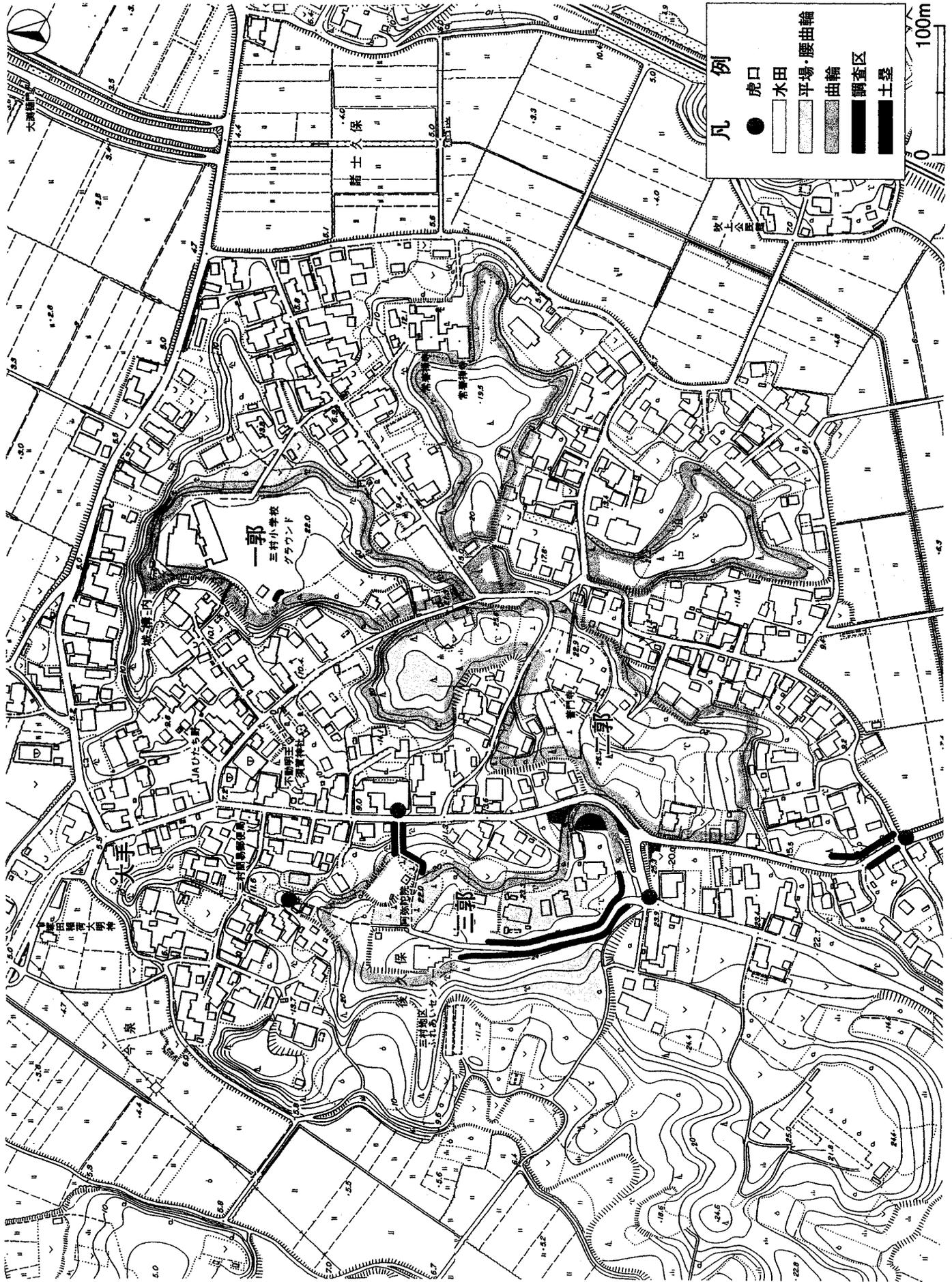
しかし、1574年(天正2)、小田氏の  
攻撃を受け落城。城主の大掾常春は25歳の若さで自害したと  
伝えられています。南の軍事的拠点を使い、大掾氏は壊滅的な



打撃を受けてしまいました。

平成18年の県道拡幅に伴  
う発掘調査では、幅5m余  
り、深さ3m前後の堀跡が発  
見されました。堀は、埋め戻  
されており、16世紀代の五  
輪塔や宝篋印塔など石塔が  
出土しています。廃城に伴  
い、土塁や堀は破壊され、  
石塔は堀に投棄されてし  
まったのでしょうか。

▲堀跡(上)と石塔の出土の様子(『三村城跡』茨城県教育財団, 2008年より転載)



『三村城跡』茨城県教育財団文化財調査報告第299集，2008年より転載)

# 東田中遺跡

—石塔埋納遺構を発見—

国道6号バイパス建設に伴い、平成23・25年度に発掘調査を行いました。戦国時代の土坑からは、石塔が埋納された跡が発見されました。ともに出土した土器から、16世紀後半から17世紀前半に埋納されたと考えられます。



遺跡の南西には、高野浜城跡こうの はまじょうが位置します。戦国時代の石岡は、府中城の大掾氏だいじょうが治めており、高野浜城跡も大掾氏の出城と考えられています。当時、南には小田氏、北には江戸・園部氏があり、攻防を繰り広げていましたが、次第に大掾氏は勢力を弱め、1574年には三村城が、1588年には取手山館が落城します。1590年には、佐竹氏によって府中城も攻略され、大掾氏は滅亡。石岡は佐竹氏の支配下になります。



石塔が埋納されたのは、まさにこの時代。佐竹氏の支配下になったとき、東田中の人々は、地区にあった石塔を集め、先祖を供養したのかもしれない。

▲石塔埋納遺構の調査の様子(『東田中遺跡・中津川遺跡2』茨城県教育財団, 2016年より転載)

# 弥陀ノ台遺跡

—戦国時代の前線基地—

小井戸地区に存在する遺跡で、平成25年11月から平成26年5月に発掘調査を行いました。事前の試掘調査からは、古墳時代から古代集落跡と想定していましたが、予想外のもの—戦国時代の堀跡も



発見することができました。小井戸地区には「要害」や「東堀」といった地名があることから、城館の存在が想定されていました。それを裏付ける考古学的な証拠が初めて発見されたのです。

園部川をはさんだすぐ対岸には、宮田館跡が存在しています。戦国時代、府中城主の大掾氏と、小河城(小美玉市の旧小川小学



▲新発見の堀跡

校)の園部氏は、園部川をはさんで対峙し、攻防を繰り広げていました。

宮田館は園部氏、弥陀ノ台遺跡は大掾氏の最前線基地だったと考えられます。

# 山崎塩海道遺跡

—戦国時代の中継基地—

平成25年、市道建設に伴い発掘調査を行ったところ、幅2m、深さ1m程ある堀跡を発見しました。

堀跡からは、16世紀末から17世紀初めの土器が出土し



ています。つまり、堀が埋まったのは戦国時代の終わりから江戸時代の初めで、機能していたのは戦国時代と考えられます。

16世紀前半、つくば市小田城を拠城とする小田氏は、小美玉市小河城まで勢力を伸ばしていました。その際の進出ルートとしては、八郷盆地から羽鳥館を經由したと考えられています。そして、16世紀後半に佐竹氏が侵攻した際にはこのルートを西進し

たと考えられています。

今回の堀は、このルート上にあたります。中継基地としての役割から堀—城館が築造され、江戸時代になると役割を終えたことから、廃城となったのでしょうか。

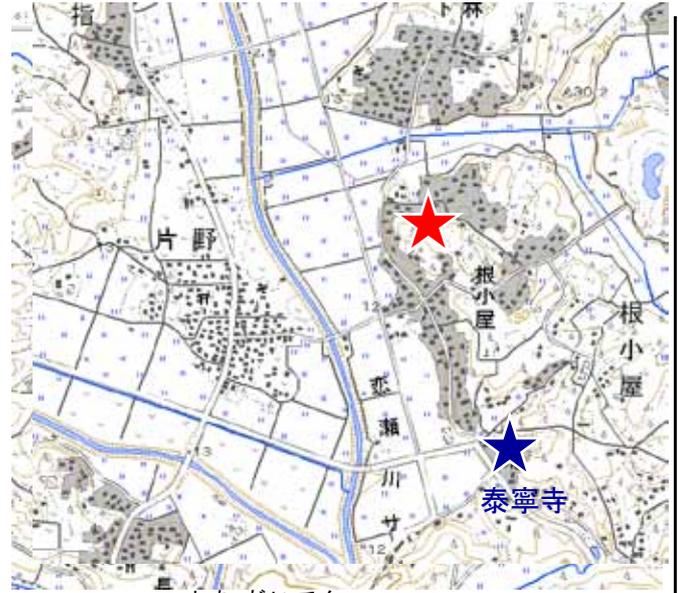


▲戦国時代の堀跡

# 片野城跡

—初の公的調査で得られた成果—

片野城跡は八郷地区根小屋にある中世山城です。文永年間(1264～1274)に築城されたと言われており、元禄10年(1695)まで使われています。主な城主としては太田資正おおた すけまさや石塚義辰、滝川雄利などがお



り、周辺には太田資正がもたらしたとされる七代天神社や、石塚氏いづかがもたらしたとされる浄瑠璃光寺じやうるりこうじや泰寧寺たいねいじなどが残っています

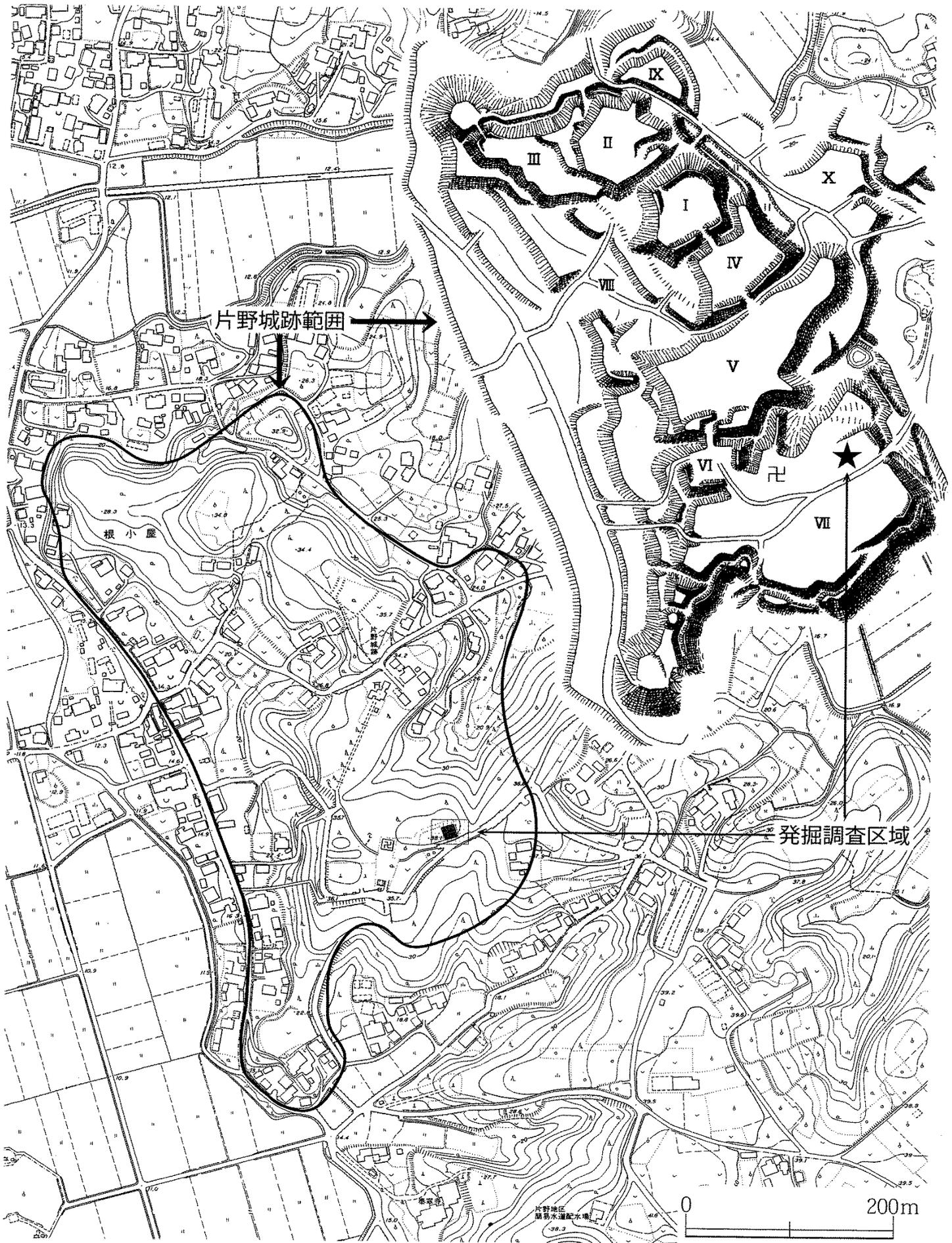
平成18年度に初の公的調査を実施しました。調査範囲は浄瑠璃光寺の元境内です。柵列が3列と土坑墓21基、火葬墓3基が検出され、墓石の一部や土器、六文銭などが出土しました。

この中で六文銭に注目してみると、寛永通宝が1枚も含まれておらず、ほとんどがより古い永楽通宝でした。このことから、墓は寛永通宝が作られ始めた1635年より前の、片野城が機能していたころのものと考えられます。



▲永楽通宝

さらに浄瑠璃光寺の元境内で検出されたことから、太田氏より石塚氏や滝川氏に關係の深い墓であると考えられます。



▲片野城位置図及び縄張り図

# 野田館跡

—発掘された一夜城きょうとうほ  
八郷盆地への橋頭堡か—

平成23年度に新発見された中世城館で、階段状に3つの曲輪くるわが連なる連郭式の構造をしています。

平成24年、農道建設に伴い発掘調査を行ったところ、中段の曲輪Ⅱについては堀や土塁が築かれて

ていましたが、上段の曲輪Ⅰ、下段の曲輪Ⅲでは、その痕跡は確認できませんでした。中段を集中的に築造することで相対的に3段に見えるように急造した「一夜城」と考えられます。

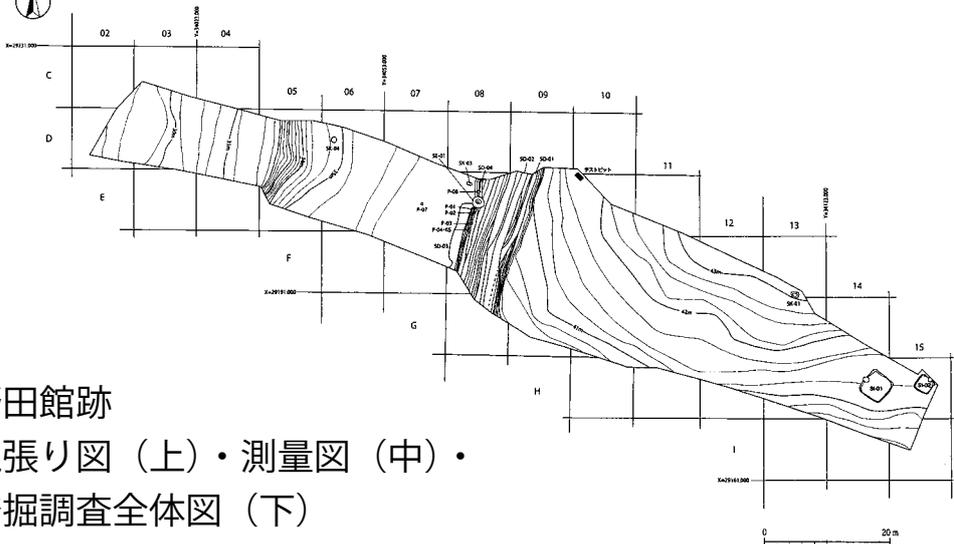
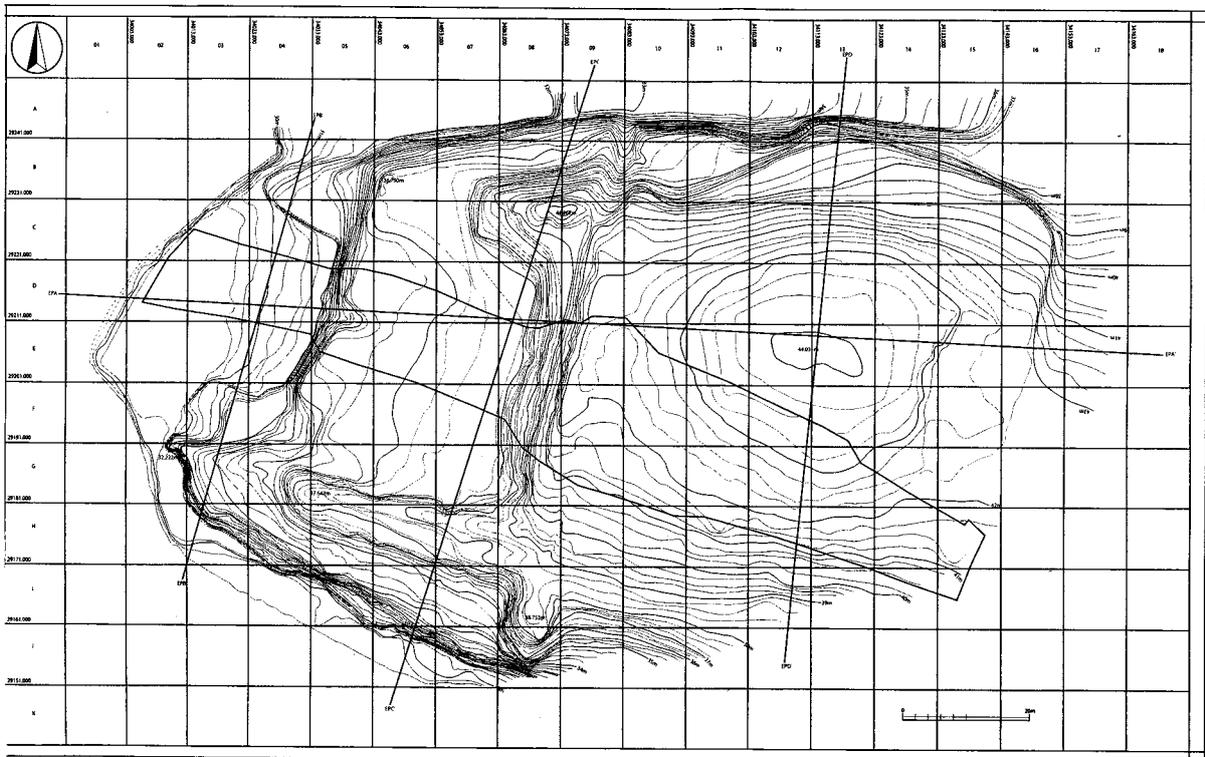
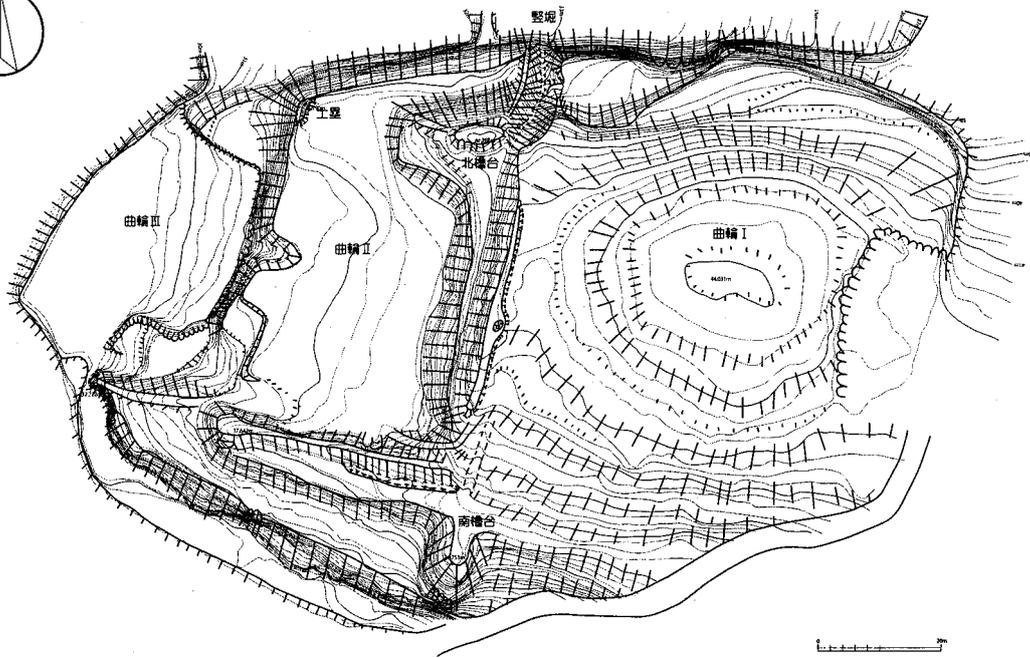
16世紀後半、佐竹氏は府中城の大掾氏と一時的に手を結び、小田氏を攻めます。八郷地区は小田氏勢力圏にありましたが、



野田館は、大掾氏の府中城、佐竹氏勢力下の宍戸氏の真家館へと通じる両街道の交差点近くに位置します。小田氏の勢力圏であった八郷地区に打ち込まれた楔—きょうとうほ橋頭堡と考えられます。

## ▲野田館の全景

(左奥の建物が豊後荘病院で、瓦会街道・瀬戸井街道交差点付近)



▲野田館跡

縄張り図 (上) ・ 測量図 (中) ・  
発掘調査全体図 (下)

(『野田城跡』石岡市教育委員会・関東文化財振興会, 2013年より転載)

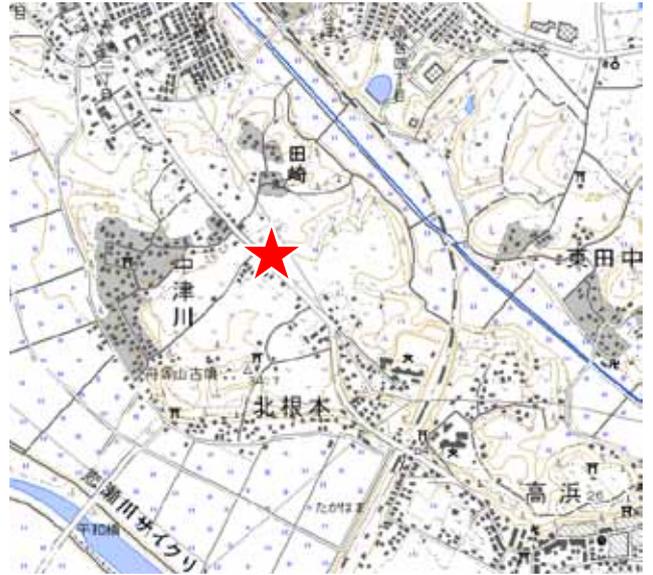
# 中津川遺跡

—発掘された道路跡—

幅6m以上の道路跡が、全長200m以上にもわたって確認されています。道路跡は、石岡市街と高浜とを結ぶ県道(高浜街道)と並行していました。

道路の路面には、荷車の車輪の跡や人の足跡が見つっています。また、硬く締まった路面が何層にも重なっており、補修されながら長期間にわたって使われていました。道路を作るときに使用された土からは、寛永通宝や江戸時代の陶器片が出土していることから、江戸時代にはすでに道路として使用されていたことがわかっています。

高浜は、国府の港として繁栄してきました。国府と高浜とを行来する多くの人たちが、この道を通っていたのでしょう。



▲現道と並行する道路跡(左)と路面に残された足跡(右)

(『見て・ふれて・楽しい考古学』茨城県教育財団調査遺跡紹介展2010, 2010年より転載)

# 八軒台掩蔽壕

—太平洋戦争末期に  
急造された掩体壕—

太平洋戦争中、石岡市には海軍航空隊の基地（飛行場）が開設されていました。滑走路の周囲には飛行機を隠すための掩体壕が30基以上建設されていましたが、現在では3基が残るだけです。

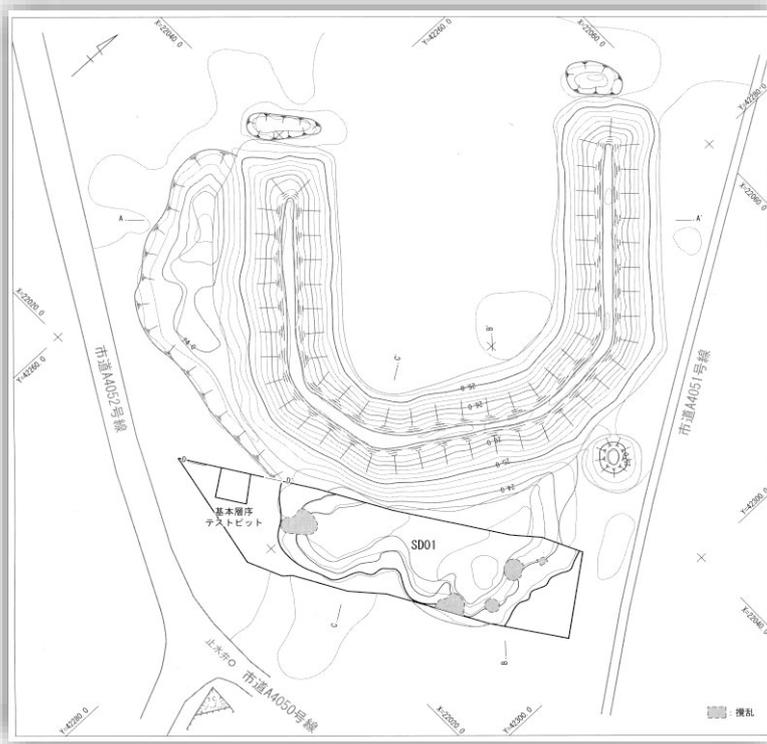


平成26年6月、そのうちの1基、東大橋のJAホールの北側に残る掩体壕（八軒台掩蔽壕）の測量調査と発掘調査を行いました。

掩体壕は、コ字形をした飛行機を1基格納するタイプのもの。しかし、平面形は左右非対称で、平行四辺形状に歪んでいました。また、周囲の「周掘部」と呼ばれる部分は、土を取るためだけ

に掘ったというような乱雑な作りでした。

戦争末期ゆえに急造せざるを得なかったという状況や測量技術の不足、あるいは労働に伴う精神的一体感の醸成のようなものが優先されたのでしょうか。



▲八軒台掩蔽壕の測量図

石岡市立ふるさと歴史館第26回企画展

## 石岡を掘る 総まくり

令和3年8月4日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195 石岡市柿岡5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016 石岡市総社1-2-10

TEL 0299-23-2398